

神戸薬科大学1年生の意識調査

—薬学教育制度変革期における薬学生の意識変化—

長 嶺 幸 子

緒 言

薬学教育6年制の実施、医療制度の変革等、薬剤師を取り巻く環境は、大きく変化してきている。歴史的にみても医と薬の分離が起こり、薬剤師の職業が誕生してきたのも、社会情勢の変化から必然的に起こってきたことである。社会の変革に応じて薬剤師の職能も変化していくことが求められている。当然薬剤師を養成する義務を担う薬学教育も変わっていかなければならない。

今、薬学教育においては、薬物療法に関わるすべてに責任を果たし得る確固たる使命感と高度な薬学の知識及び技能を持つと同時に、医療の一翼を担う職能人としての自覚と認識を持った薬剤師の育成が社会から求められている。また神戸薬科大学では、大学の理念の中に「社会に大きく開かれた大学であることを意識し、医療人としての使命感と倫理観を十分に理解し、高度な薬学の知識を身に付けた薬剤師、並びに教育・研究者を養成すること」とうたっている。

即ち、人間性、知識、技術を身に付けた社会から求められるような医療の担い手の一員である薬剤師を如何にして育成するのか、そのためにはどのような教育を展開しなければならないのか、を考えていく必要がある。6年制薬学教育では、社会のニーズに応えることができる薬剤師、薬学研究者の育成を目指

*2008年11月28日受理、2009年2月19日最終稿受理。

し、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」¹⁾が作成された。モデル・コアカリキュラムには、薬学の学習目標を明確に持ち、学習意欲につなげることができる有効な教育システムとして早期体験学習が提示されている。早期体験学習の目的は、入学早期に医療・福祉の現場を理解し、患者の悩み、苦しみを思いやる気持ちを育て、薬学生として適切に対応できる能力を養うことにある。しかし、どのような効果があるのかは、まだ十分に検討されていない。

本学においても、2005年から早期体験学習を1年次生に配当してきた。早期体験学習をより意義深いものにするためには、その教育効果を検討することが求められている。今回はそれに先立ち、まず6年制の学生が明確な目的意識をもって薬学部を選択し、進学してきたのか、また薬剤師という職業をどのように捉えているのか等を知る目的で、意識調査を行い、筆者なりの考察を行った。

方 法

1. アンケート調査対象と実施方法

神戸薬科大学1年生全員を対象に、平成17年から平成20年の4年間にわたりアンケート調査を行った。アンケートは、4月の早期体験学習の全体オリエンテーション時に実施し、記入後、すぐに回収を行った。また、無回答あるいは解読不可能なものは無効回答とし、解析を行った。

2. アンケート内容

アンケートでは、「性別」、「年齢」、「薬学部進学にもっとも影響を与えた人」、「薬学部を選んだ目的」、また「薬学に対するイメージ」、「薬剤師の仕事について」、「医療人に必要な資質について」に関する調査を行った（Table 1）。

その他、平成17年度入学生には、「薬剤師免許取得について」及び仮に今年度6年制になっていたら「6年制薬学部を選択したか」についての調査も行った

(Table 2)。

Table 1 アンケート内容(1)

一般情報	
年齢、性別	
薬学部進学にもっとも影響を与えた人	
1. 両親 2. 兄弟 3. 小学校の先生 4. 中学校の先生 5. 高校の先生 6. 予備校の先生 7. 自分自身で決めた 8. その他	左記の8項目の回答肢からもっとも当てはまるものを一つ選択
薬学部を選んだ目的	
1. 薬剤師として仕事をしたいから (薬剤師になりたいから) 2. 就職率が良いから 3. 創薬の仕事がしたいから 4. 薬の研究をしたいから 5. 将来性があるから 6. 国家資格が取れるから 7. 親が勧めたから 8. その他	左記の8項目の回答肢からもっとも当てはまるものを一つ選択
薬学に対するイメージ	
1. 化学そのものである 2. 人の役に立つ学問である 3. 活躍できる分野が広い 4. 就職率が良い	各項目 “もっともそう思う” “ややそう思う” “どちらでもない” “あまりそう思わない” “全くそう思わない” の5段階評価で回答
薬剤師の仕事について	
1. 将来性のある仕事だと思う 2. 人の命を預かる責任重大な仕事だと思う 3. 社会に貢献できる仕事だと思う 4. 男女が対等に活躍できる仕事だと思う 5. 他の医療職に比べて楽な仕事だと思う	各項目 “もっともそう思う” “ややそう思う” “どちらでもない” “あまりそう思わない” “全くそう思わない” の5段階評価で回答

医療人に必要な資質について	
1. 「責任感」が必要 2. 「忍耐力（粘り強さ）」が必要な 3. 「思いやり（やさしさ）」が必要 4. 「的確な判断力」が必要 5. 「誠実さ」が必要 6. 「沈着・冷静さ」が必要 7. 「協調性」が必要 8. 「コミュニケーション力」が必要 9. 「問題発見・解決能力」が必要	各項目 “もっともそう思う” “ややそう思う” “どちらでもない” “あまりそう思わない” “全くそう思わない” の5段階評価で回答

Table 2 アンケート内容(2)

薬剤師免許取得について	
1. 取得したい 理由：1. 薬剤師として仕事をしたいから 2. 資格を持っていると有利だから 3. 周囲から勧められたから 4. その他 2. 必ず取得したいとは思わない 理由：1. 薬剤師免許を必要としない職業も 考えているから 2. その他 3. 取得したいとは思わない 理由：1. 薬剤師として仕事はしないから 2. その他	左記3項目の回答肢からもっとも当てはまるものを一つ選択 また 選択した理由について、もっとも当てはまるものを一つ選択
平成17年度から薬学部6年制が施行されていたら薬学部を選択したかどうか	
薬学部を 1. 選択した 理由：1. 薬剤師の職業に魅力を感じるから 2. 資格があると有利だから 3. 将来性があると考えたから 4. その他 2. わからない 3. 選択しない 理由：1. それほど薬剤師の仕事に魅力を感じないから 2. 4年で資格がとれないから 3. 6年間は経済的に大変だから 4. その他	左記の3項目の回答肢からもっとも当てはまるものを一つ選択 また 選択した理由について、もっとも当てはまるものを一つ選択

3. 統計学的解析

アンケート結果の統計的な差は検定によって確認した。統計ソフトはStatcelを用いた。p < 0.05を統計的に有意であると判断した。

結 果

1. アンケート回答状況および一般情報

アンケートの回収率は99%以上であった。また男子学生と女子学生の比率は、年により多少ばらつきはあるが、ほぼ男子学生1に対して女子学生2の割合であった。年齢分布は、10代が90%以上を占めており、20代が5%から9%、30代、40代も少数いた (Table 3)。

Table 3

入学年度	男子学生 (%)	女子学生 (%)	10代 (%)	20代 (%)
平成17年度	34	66	93	6
平成18年度	35	65	91	9
平成19年度	35	65	90	9
平成20年度	30	70	94	5

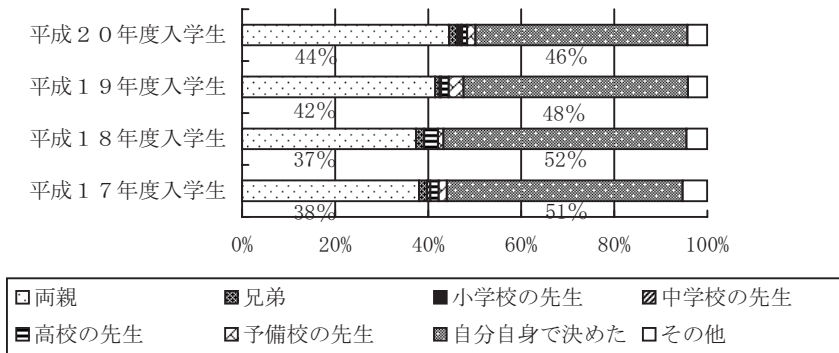
2. アンケート結果

(1) 薬学部進学にもっとも影響を与えた人

「薬学部に進学することを勧めたのは誰ですか?」という設問について、Table 1 に示すような回答肢からもっとも当てはまる項目を一つ選んで回答してもらった。

調査をしたいずれの年も、「自分自身で決めた」と回答した学生が一番多く、平均して50%であった。次に多かったのが「両親に勧められた」で約40%を占めていた (Fig. 1)。また男子学生と女子学生では、この傾向に違いが見られた。

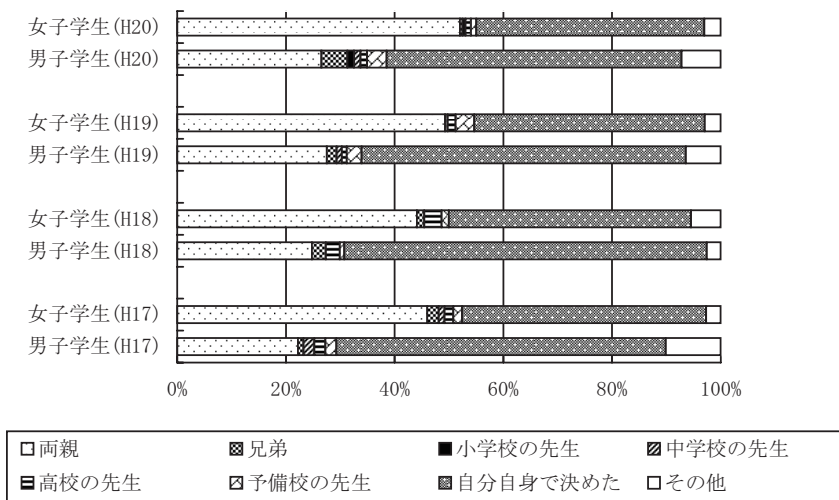
Fig. 1 薬学部進学にもっとも影響を与えた人



男子学生では「自分自身で決めた」と答えた学生が約60%、「両親に勧められた」が25%であった。女子学生では「両親に勧められた」と「自分自身で決めた」がほぼ同率であったが「両親に勧められた」のほうが上位を占めた (Fig. 2)。

男女で「両親に勧められた」を選択した学生の比率に違いが認められるかを検証した。その結果1%で有意な差が認められた。即ち、いずれの年も女子学

Fig. 2 薬学部進学にもっとも影響を与えた人 (男女差)



生の方が男子学生よりも、薬学部進学にあたって両親の影響を受けていることがわかった (χ^2 独立性の検定、 $p < 0.01$)。また男女で「自分自身で決めた」と回答した学生の比率に違いがあるかどうかを検証した結果、平成20年度入学生以外は5%で有意な差が認められたが、平成20年度は「自分自身で決めた」と回答した学生の比率に男女差は認められなかった。

(2) 薬剤師免許取得に関する設問(平成17年入学の4年制薬学部最後の入学生)

平成17年度の入学生は4年制薬学部の最後の入学生になるので、薬剤師免許の取得に関する設問を設けた。

「薬剤師免許はぜひ取得したいですか」との設問に、97%の学生が「取得したい」と回答した。また「必ず取得したいとは思っていない」と回答した学生は3%であった (Fig. 3)。

「取得したい」を選択した学生にその理由について尋ねた。70%の学生が「薬剤師として仕事がしたいから」を選び、残りの30%の学生は「資格を持っていると有利だから」を選択した (Fig. 4)。

「必ず取得したいとは思っていない」と回答した学生にその理由を尋ねると、「薬剤師免許を必要としない職業も考え

Fig. 3 薬剤師免許はぜひ取得したいですか？

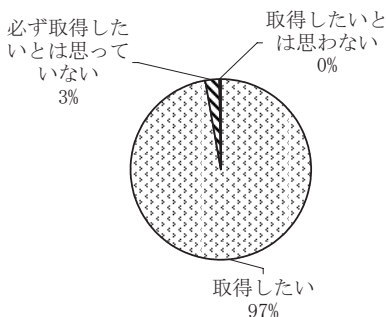
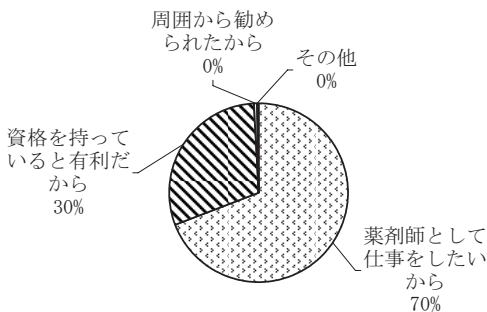
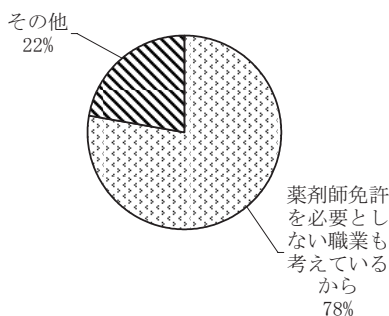


Fig. 4 薬剤師免許を取得したい理由



ているから」を78%の学生が選択した。「その他」を選択したのは22%であった (Fig. 5)。

Fig. 5 薬剤師免許を必ずしも取得したいとは思っていない理由



(3) 薬学部6年制における薬学部進学の意味

「もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか」の設問に、有効回答者数262名のうち42%の学生が「選択した」と回答した。また21%は「選択しない」、37%は「わからない」と回答した (Fig. 6)。男子学生では36%の学生が「選択した」と回答しており、31%が「選択しない」、33%が「わからない」と回答した (Fig. 7)。女子学生では46%が「選択した」、15%が「選択しない」、39%が「わからない」と回答した (Fig. 8)。6年制薬学部の選択について、男女間で統計的に有意な差が認められた ($p < 0.05$)。

さらに、6年制になっても薬学部を選択したと答えた学生の理由について検討を行った。「薬剤師の仕事に魅力を感じるから」を選択した学生が62%、「資格があると有利だから」が14%、「将来性があると考えたから」が22%であった (Fig. 9)。男子学生では、46%が「薬剤師の職業に魅力を感じるから」、22%が「資格があると有利だから」、27%が「将来性があると考えたから」と回答した (Fig. 10)。女子学生では、69%が「薬剤師の職業に魅力を感じるから」、11%

が「資格があると有利だから」、20%が「将来性があると考えたから」と回答した (Fig. 11)。男女間で統計的に検討を行った結果、有意な差が認められた (χ^2 検定、 $p < 0.05$)。

「選択しない」と答えた学生の理由は、「それほど薬剤師の職業に魅力を感じないから」が17%、「4年で資格がとれないから」17%、「6年間は経済的に大変だから」が62%、「その他」が4%となっていた (Fig. 12)。

Fig. 6 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？

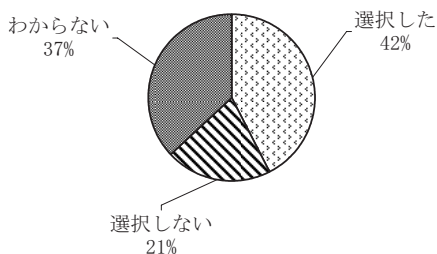


Fig. 7 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？ (男子学生)

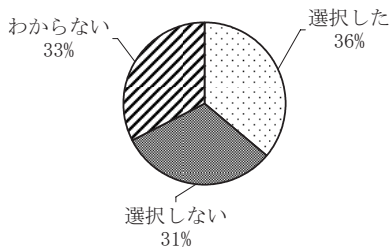


Fig. 8 もし今年薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？（女子学生）

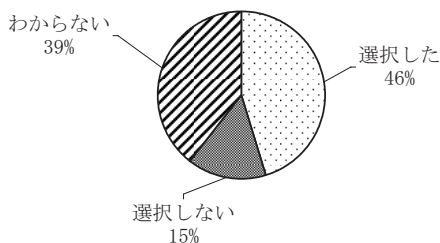


Fig. 9 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？の設問に「選択した」を選んだ理由

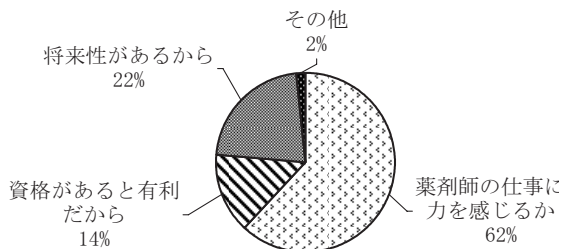


Fig. 10 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？の設問に「選択した」を選んだ理由（男子学生）

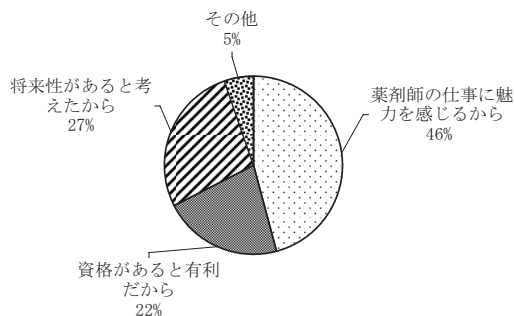


Fig. 11 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？の設問に「選択した」を選んだ理由（女子学生）

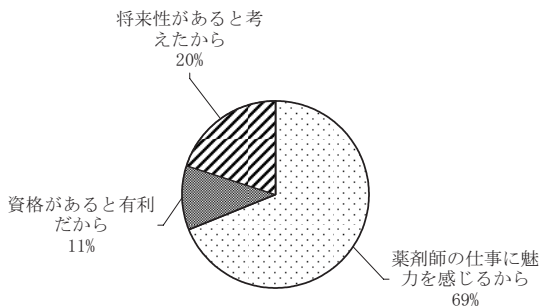
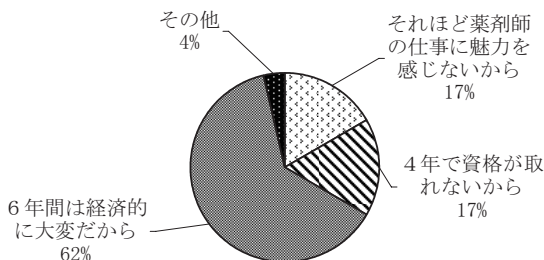


Fig. 12 もし今年から薬学部が6年制になっていたら、あなたは薬学部を選択しましたか？の設問に「選択しない」を選んだ理由



(4) 薬学部を選んだ目的

薬学部を選んだ目的については、4年制薬学部最後の学年である平成17年度の入学生は Table 1 の8項目の回答肢から「薬剤師として仕事をしたいから（薬剤師になりたいから）」、「就職率が良いから」、「創薬の仕事がしたいから」、「薬の研究をしたいから」、「親が勧めたから」、「その他」の6項目を選んだ。その中でもっとも当てはまる項目を一つ選んで回答してもらった。

平成17年度の入学生は「薬剤師として仕事をしたいから」と回答した学生が一番多く58%であった。次が「薬の研究をしたいから」が15%となっていた

(Fig. 13)。

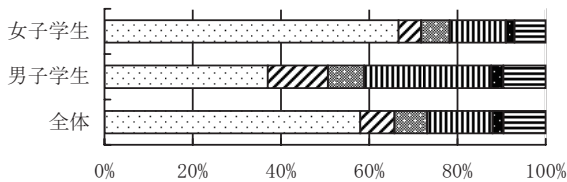
また男子学生と女子学生とでは薬学部を選んだ目的に差があるかどうかを検討した。男子学生では「薬剤師として仕事をしたいから」と回答した学生は37%、「就職率がよいから」が14%、「創薬の仕事がしたいから」8%、「薬の研究をしたいから」29%、「親が勧めたから」3%、「その他」9%となっていた。女子学生では「薬剤師として仕事をしたいから」と回答した学生は66%、「就職率がよいから」が4%、「創薬の仕事がしたいから」8%、「薬の研究をしたいから」11%、「親が勧めたから」3%、「その他」4%となっていた (Fig. 13)。男子学生と女子学生とでは、薬学部進学目的に差があるかどうか検定を行った。検定の結果、男女で薬学部進学目的に有意な差が認められた。平成20年度入学生でも薬学部進学目的に男女差が認められた (χ^2 独立性の検定、 $p < 0.01$)。

平成18年から平成20年の3年間の6年制薬学部学生の意識調査では、薬学部進学目的の設問に対して、回答肢に「将来性があるから」、「国家資格がとれるから」の2項目を追加し、8項目にした。これは平成17年度入学生のなかで「6年制になっても薬学部に進学した」と回答した学生に「6年制薬学部に進学する理由」を調査したところ、62%の学生が「薬剤師の仕事に魅力を感じるから」を選択し、14%の学生が「資格があると有利だから」、また22%の学生が「将来性があるから」と回答した (Fig. 9)。その結果を踏まえ回答肢を追加した。

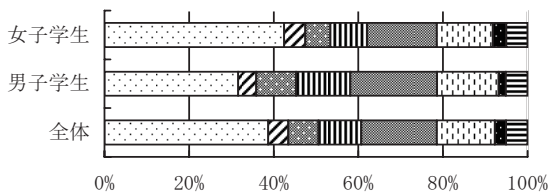
薬学部進学目的に、「薬剤師になりたいから」を選択した学生は、平成18年度入学生では39%、平成19年度入学生では44%、平成20年度では36%という結果であった。これは平成17年度入学生の58%に比べると少ないように思えるが、平成17年と平成18年以降とで、薬学部進学目的の回答肢が少し異なっていたためであると考えられた。「薬学部進学目的」について4年制と6年制を単純には比較検討できないが、平成17年度入学生（4年制薬学部最後の学生）のうち、6年制になっても薬学部を選択したと回答した学生にその理由を聞いたと

Fig. 13 薬学進学目的について

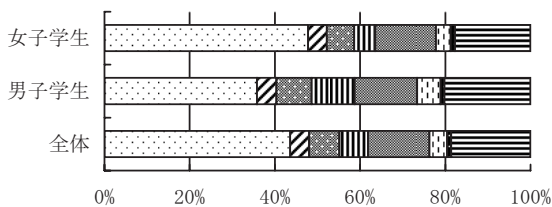
平成17年度入学生



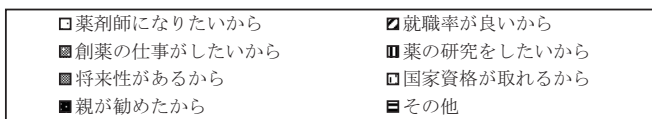
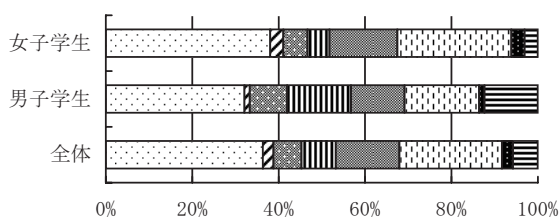
平成18年度入学生



平成19年度入学生



平成20年度入学生



ころ、62%の学生が「薬剤師の仕事に魅力を感じるから」と答えていた。このことは、薬学部進学目的に「薬剤師の仕事をしたいから」を選んだ学生の約6割が、積極的に「薬剤師になりたい」から薬学部に進学したと考えられる。即ち平成17年度入学生のうち「薬剤師になりたい」という明確な目的意識を持った学生の割合は約36%程度になる。これから言えることは、薬学部に入學してくる学生のうち約4割前後の学生が、「薬剤師になりたいから」薬学部に入學してきていると考えられる。

全般的に見ると、「薬剤師になりたい」を選択するのは、女子学生が多く、「薬の研究をしたいから」を選択するのは、男子学生が多いといえる。

(5) 薬学に対するイメージ

「薬学に対してどのようなイメージを持っていますか」という設問では、「化学そのものである」、「人の役に立つ学問である」、「活躍できる分野が広い」、「就職率が良い」の4項目について、「もっともそう思う」、「ややそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5段階で回答してもらった (Table 1)。

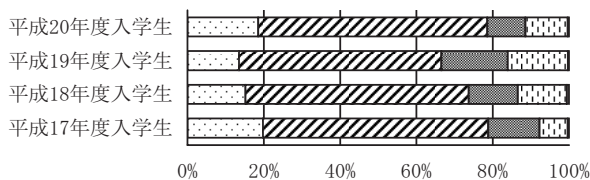
薬学生が薬学に対してどのようなイメージを持っているのか。これらの結果から全般的にいえることは、薬学は人の役に立つ学問であり、就職率が良く、活躍できる分野が広いと考えていることが分かる。「化学そのものである」というイメージについては、いずれの年も「もっともそう思う」と回答した学生は20%弱、「ややそう思う」と回答した学生も加えると約70～80%の学生がそのように考えていることが分かった。

入学年度毎の傾向をみると、薬学は化学そのものであると考える学生は減少傾向にある。また「活躍できる分野が広い」と「就職率が良い」の項目については、4年制の学生に比べて、6年制の学生では、「就職率が良い」、「活躍できる分野が広い」の項目で「もっともそう思う」と回答した学生は有意に減少し

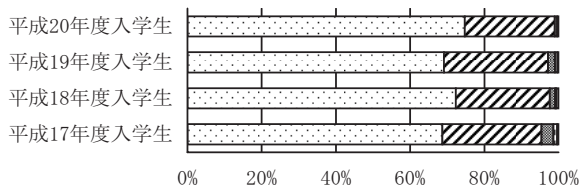
ていた (Fig. 14、 $p < 0.01$)。

Fig. 14 薬学に対してどのようなイメージを持っていますか？

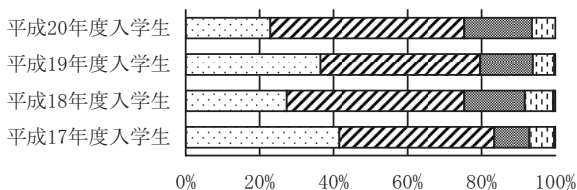
薬学は化学そのものである



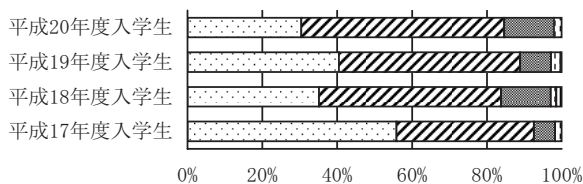
薬学は人の役に立つ学問である



薬学は活躍できる分野が広い



薬学は就職率が良い

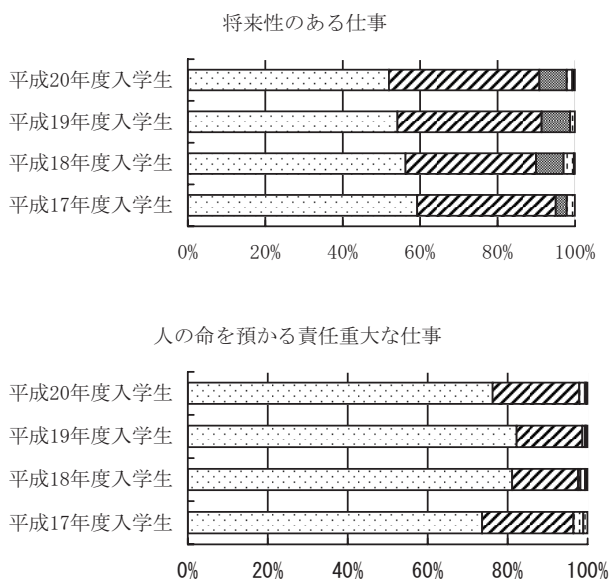


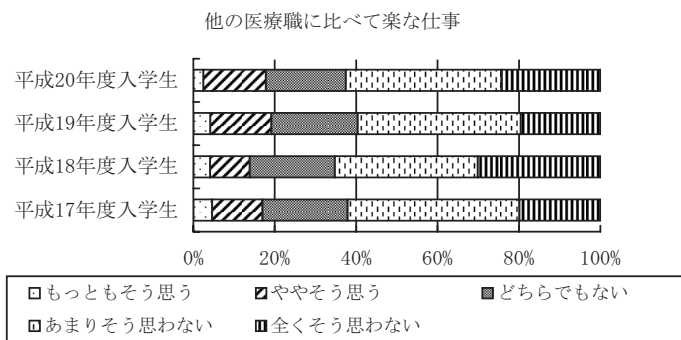
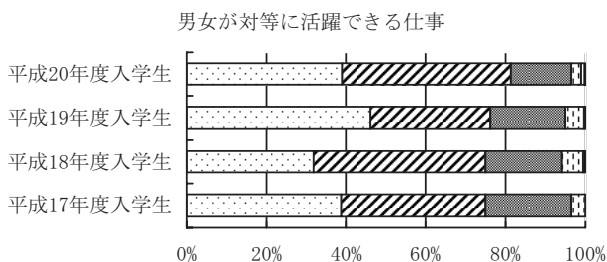
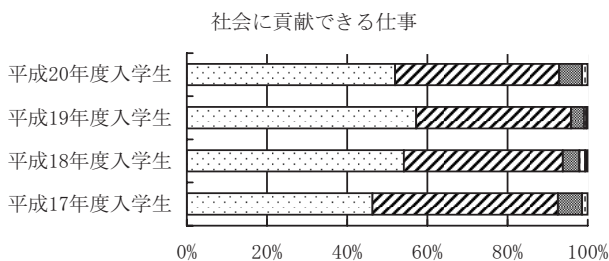
☐ もともとそう思う
 ☒ ややそう思う
 ☐ どちらでもない
☐ あまりそう思わない
 ☒ 全くそう思わない

(6) 薬剤師の仕事について

学生が描く薬剤師の仕事は、「将来性のある仕事」、「人の命を預かる責任重大な仕事」、「社会に貢献できる仕事」、「男女が対等に活躍できる仕事」については肯定的な回答が多かった（もっともそう思う、ややそう思う）。「将来性のある仕事」、「社会に貢献できる仕事」については90%以上の学生が、「人の命を預かる仕事」については100%近い学生が肯定的にとらえていた。また「男女が対等に活躍できる仕事」については、80%近くの学生が肯定的にとらえていた。その他「他の医療職に比べて楽な仕事」については、約60%の学生がそれほど他の医療職と比べて楽な仕事とは考えていないことが伺えた。学生たちの描く薬剤師の仕事像については、4年制薬学部も6年制薬学部の学生も認識に差は認められなかった（Fig. 15）。

Fig.15 薬剤師の仕事についてどのようなイメージを持っていますか？





(7) 医療人に必要な資質について

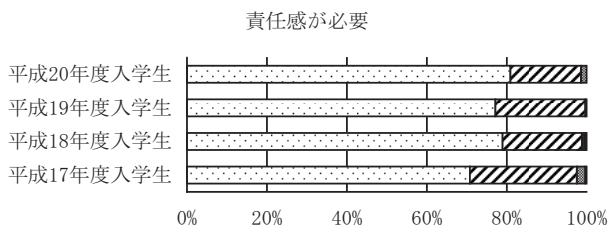
医療人の資質について9項目の質問について、「もっともそう思う」、「ややそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の5段階で回答してもらった (Table 1)。

全般的に、入学してすぐの学生に医療人の一員として薬剤師が仕事をしてゆ

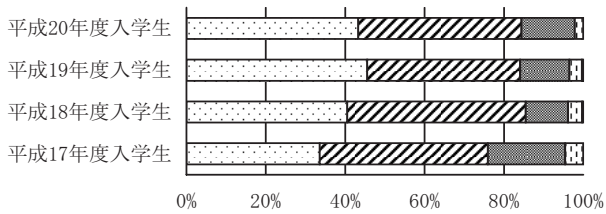
くにあたってどのような資質が必要か質問したところ、「責任感」、「的確な判断力」については、80%以上の学生が医療人としての薬剤師にもっとも必要であると回答した。「ややそう思う」も加えると98%以上の学生が医療人として必要であると考えていることが分かる。また「思いやり」、「誠実さ」、「沈着冷静さ」、「コミュニケーション力」あるいは「問題発見・解決能力」については、50%以上の学生が「もっともそう思う」と回答していた。「ややそう思う」も加えると90%前後の学生が医療人として必要な資質であると回答した。この設問項目のなかの「忍耐力」、「協調性」については、「もっともそう思う」と答えた学生はいずれも約40%近くであったが、「ややそう思う」を加えると80%近くの学生がやはり医療人として必要な資質であると回答した（Fig. 16）。

また「責任感」（クラスカル・ウォリス検定、 $p < 0.05$ ）、「忍耐力」、「思いやり」、「協調性」、「コミュニケーション力」、「問題発見・解決能力」については（クラスカル・ウォリス検定、 $p < 0.01$ ）、4年制薬学部と6年制薬学部とでは、認識に有意な差が認められた。6年制薬学部の学生の方が、より強くそのような資質が医療人には必要であると認識していた。

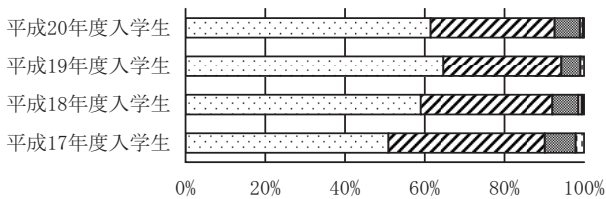
Fig.16 医療人に必要な資質について



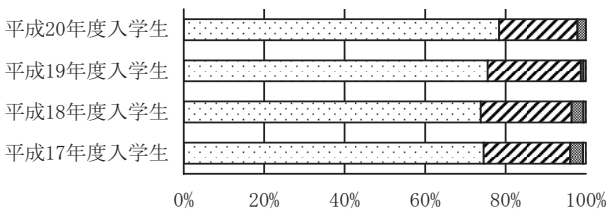
忍耐力が必要



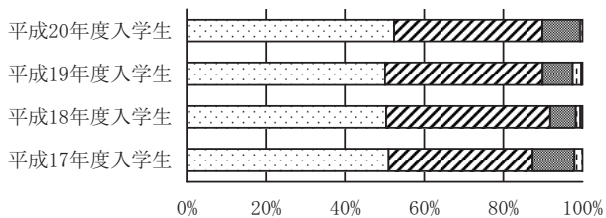
思いやりが必要



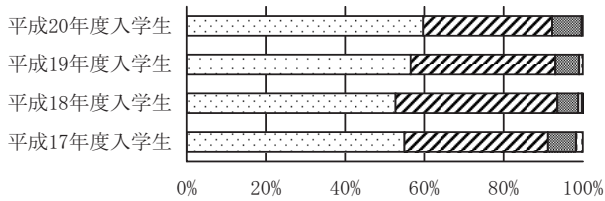
的確な判断力が必要



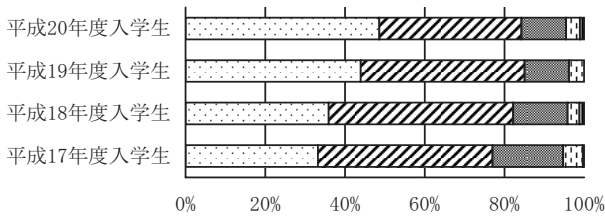
誠実さが必要



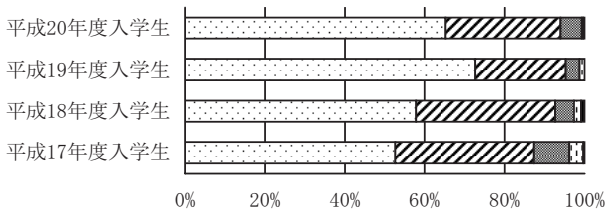
沈着・冷静さが必要



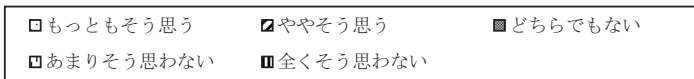
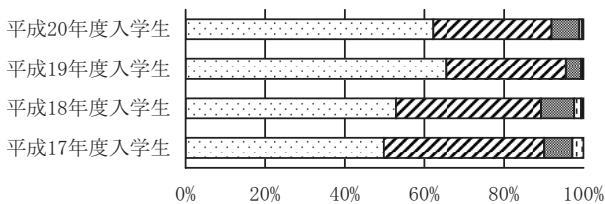
協調性が必要



コミュニケーション力が必要



問題発見・解決能力が必要



考 察

平成18年に薬学部6年制が発足し、薬学部では有能な薬剤師育成を社会から求められている。医薬分業の進展や、平成4年の第2次医療法改正では、医師、歯科医師、看護師とともに薬剤師も医療の担い手として法的に位置づけられたこと、また平成18年の第5次医療法改正では、「調剤を行う薬局」が医療提供施設として位置づけられたように、薬剤師を取り巻く環境が大きく変化してきている。そのため従来の薬学教育に不足していた社会薬学系や医療系の科目がカリキュラムに組み込まれるようになった。また「薬学生として学習に対するモチベーションを高める」、「医療への期待感や使命感を養う」あるいは「将来医療の担い手となる自覚を持つ」といった動機付け教育の一環として早期体験学習なども組み込まれるようになった。しかし学生のモチベーション向上につなげるには、どのような教育を、どのように行えば良いのか、まだ検証されていない。これらの検証を行うには、まず学生の考えていることや、何を求めているのかを知ることが必要である。薬学生の気質を知る目的で4年間にわたるアンケート調査を行った結果について、本稿で以下のような筆者なりの考察を試みてみたい。

薬学部に進学する目的を調査したところ、「薬剤師になりたいから」という積極的な動機で薬学部に進学してくる学生の割合は、4年制、6年制のいずれも約4割程度と考えられる。薬学部への進学動機については、4年制と6年制の学生で、あまり変化していないということになる。有能な薬剤師の育成を掲げている6年制の薬学部に入學してくる学生の目的にあまり変化がないということは、6年制になってまだ日が浅いということも関係していると思われるが、薬剤師の職能そのものが、まだ世間からそれほど高く評価されていないことも関係していると考えられる。

そのほか薬学部進学目的のところで、「就職率が良い」という回答肢を選んだ

学生の割合は年々減少しており、薬学に対するイメージの設問でも「就職率が良い」というイメージは有意に減少してきている（差の検定、 $p < 0.01$ ）。また「活躍できる分野が広い」という薬学に対するイメージでも、4年制の学生に比べて、6年制の学生では有意に減少傾向を示していることがわかった（差の検定、 $p < 0.01$ ）。

4年制薬学部学生の自由意見の中に、「薬学は理学関係の職業にはほぼ対応できる」、「社会にでて、幅広い分野で活躍できる」に代表される意見や「就職しやすく比較的楽な仕事」、「年をとっても続けられる仕事」あるいは「資格をとれば休職してもすぐに復帰できる」といった意見が多く書かれていた²⁾。また6年制薬学部学生の自由意見の中にも、「安定した職業」や「将来性のある仕事」「就職に有利」「絶対職に就ける」といった意見が書かれていたが、資格をとればそれで一生安泰と考える学生は少なく、「薬についての高度な知識が必要になってきているため一生勉強し続ける」や「薬剤師になるまでも、なっ
てからもずっと勉強が大変」といった意見も書かれていた³⁾。このことは、学生は社会情勢を理解し、医療のなかで薬剤師に求められているものをある程度理解しているものと考えられる。

平成15年に行った神戸薬科大学の学生と、甲南大学経営学部の学生の大学進学にあたり、もっとも影響を受けた人の意識調査の結果では、薬学部の学生は、「両親」と回答した学生の割合は37%、経営学部の学生は11%と回答しており、薬学部の学生の方が大学進学にあたって両親の影響が大きいことがわかった⁴⁾。平成17年から平成18年の4年間の調査結果をみると、大学進学にあってもっとも影響を受けた人の項目で、「両親の影響を受けた」と回答した学生の割合は38%、37%、42%、44%（平成17年、18年、19年、20年）となり、統計的には有意な差は見られなかったが、年々増加傾向を示していた。平成17年に6年制の薬学部への進学的意思について調査を行った結果では、「進学しない」と回答した学生は21%、「わからない」と回答した学生は37%であった。6年制

薬学部への進学を選択しない理由として「6年間は経済的に大変だから」と回答した学生がもっとも多かった (Fig. 12)。このような状況を考えると、特に私学の薬学部では、経済的な問題もあり、薬学部進学にあたり両親の意向が大きく影響を及ぼすものと考えられる。

また自由記述で、薬学や薬剤師に対するイメージを書いてもらったところ、6年制になってからは、医薬分業やチーム医療などについての薬剤師の積極的な役割についての意見が多くみられた。また「6年制になったことで、さらに責任感や重大感が問われる仕事だと思う」、「医師と共に活躍する大変責任のある仕事」といった意見にみられるように、薬学部が6年制になったことで、薬剤師の仕事に対する意識に変化が感じられた³⁾。

これらと同様のコメントは、平成18年、19年にも多くみられた。6年制薬学部の学生の自信、自負心の表れと考えられる。

一方、このような意見とは反対に、6年制薬学部に入學してきた学生の中にも「病院で薬の袋詰めをしている人」、「存在感がうすい」、「医師が決めた薬だけを調剤する仕事」といった従来からよく言われていた「姿の見えない」薬剤師像を抱く者もいた。しかし以前と比べるとそのようなマイナスイメージを持つ学生は、6年制に移行してから減少してきている。

特に6年制3年目の平成20年度の入学生では、「人の生死に関わる責任の重い仕事、だからこそ高度な技術や深い知識が求められている仕事」、「薬剤師の仕事は医療現場で医師や看護師と協力し、患者にもっとも適した治療法を探す、人を助ける仕事」といった、薬剤師に社会から強く求められているような薬剤師像を抱いている学生が増えてきた³⁾。これから育成していかなければならない薬剤師のあるべき姿をしっかりと認識している学生が増えてきていることを伺い知ることが出来る。

従来、医療の現場にしながら、薬剤師はモノ（薬）と向き合うことが仕事の大部分を占めていた。したがってチーム医療や服薬指導といった人とのつなが

りを求められる分野が苦手であるといったイメージが強かったが、薬学教育6年制が始まり、また社会から医療人としての役割や医療提供施設としての薬局の役割を求められるようになり、薬剤師の意識が変化してきている。このような社会環境の中で、学生の意識も医療人としての認識は4年制薬学部の際とは変化してきている。医療人に必要な資質についての調査では、「責任感」、「忍耐力」、「思いやり」、「協調性」、「コミュニケーション力」、「問題発見・解決能力」の6項目については、4年制の学生に比べて6年制の学生では、これらの資質が薬剤師にはもっとも必要と考える学生が有意に増えている (Fig. 16, $p < 0.05$)。

6年制薬学部の学生では、多くの学生が薬学を学ぶことの意義を理解していることが伺える。しかし一部の学生は、薬学を学ぶことにそれほど意義を感じておらず、進学目的にしても「親が勧めたから」と回答する学生もいて、意欲のない学生もいる。6年制が始まって時間が経つにつれて、学生も社会も薬剤師、薬学に対して一定の認識を示すようになり、徐々に薬剤師の職能に対する認識に変化がでてきている。そのような社会の動きが、医療人に必要な資質についての調査からも伺えるように、薬学生の意識にも少しずつ変化を及ぼしていることがわかってきた。薬学部6年制になったことで社会から求められるものも多くなり、学生にも自負心が芽生えてきたと考えられる。

『学習意欲の心理学』⁵⁾の著者が、その著書のなかで「自ら学ぶ意欲」、即ち「内発的学習意欲」を支えているのは、有能感、自己決定感と他者受容感の3つの要素であると述べている。また、有能感とは「自分は勉強ができるんだ」というような気持ちであり、自己決定感は「自分のことは自分で決めているんだ」という気持ち、他者受容感とは「自分はまわりの大切な人から受容されているんだ」という気持ちであると、この著書の中で述べている。また「他者受容感」によって「有能感」や「自己決定感」が育成されるという。

内発的な学習行動は「有能感」と「自己決定感」という2つの源に支えられ

て、積極的に外界へ働きかけ、知的好奇心、達成、挑戦という学習行動となつていくと考えられている。薬学を学ぶ意欲を持たせるような動機付け教育を行うには、まさにこの内発的学習意欲を高めることが重要である。学生の自由意見の中に、「6年制になったことで、さらに責任感や重大感が問われる仕事だと思う」や「医師と共に活躍する大変責任のある仕事」といった記述にみられるように、6年制になって難しくなった薬学部に進むことが出来たという「有能感」や6年制になったことで薬剤師の存在を認められたという「他者受容感」が学生に「自負心」を形成していると考えられる。

6年制薬学部の学生の意識に、少しずつ変化が出てきているのは、6年制になったことによる「有能感」や「自負心」が大きく影響しているのではないかとと思われる。

薬学を学ぶことの意義や動機付けをさらに強く学生に認識させるためには、薬剤師が目指すべき明確な目標や医療現場において薬剤師に求められる資質、あるいは社会からどのような能力を期待されているかを理解させるような教育がこれからの薬学教育に積極的かつ一貫して求められるべきものと考えられる。

註

- 1) 日本薬学会 薬学教育カリキュラムを検討する協議会「日本薬学会 薬学教育モデル・カリキュラム」(2002)
- 2) 薬剤師及び薬学に対するイメージ (平成17年度入学生)

薬剤師について	<ul style="list-style-type: none"> • 病院薬剤師などは薬を適正に使用してもらえるよう伝えるほかにも患者とのコミュニケーションがとれる相手を思いやる気持ちが必要な仕事 • 正確かつ速く薬を調合し、説明する仕事 • 知力だけでなく倫理感を持った人が適している • 資格のいる仕事 • 就職しやすく比較的楽な仕事 • 年をとっても続けられる仕事
---------	---

	<ul style="list-style-type: none"> • 資格をとれば休業してもすぐに復帰できる（再就職しやすい） • 手に職をつけたい女の人がとる資格 • 景気に左右されることのない職業 • 病院で医師の処方箋どおりに薬を調合する人 • 正確な知識、優しさを必要とする • 女性が活躍できる仕事 • 安定した仕事 • 失敗の許されない仕事 • 人助けになる喜ばれる仕事 • 将来性のある仕事（女性であっても長く続けられる仕事） • 女性が結婚しても子供はできて続けられる仕事 • 医師の補佐役 • 単純作業 • 最近役割が増えてきた • まじめで信頼がおける • 地味（はなやかさがない、目立たない）
薬学について	<ul style="list-style-type: none"> • 薬学は理学関係の職業にほぼ対応できる • 社会にでて、幅広い分野で活躍できる • 薬のいらない健康な身体をつくるにはどうすればよいかを考える • どういうものから薬をつくり、その薬がどういう働きをするかについて勉強するところ • 化学を極めた学部 • 薬の名前や効用をひたすら覚える • むつかしい

3）薬剤師及び薬学に対するイメージ（平成18年度、19年度、20年度入学生）

薬剤師について	<ul style="list-style-type: none"> • 医薬分業が進行していて、薬剤師、薬学の役割が見直されている • 薬で人助けができる • 患者さんのために働く責任があり、やりがいのある仕事 • スペシャリストである薬剤師は、人間と薬の両方にたずさわるともやりがいのある仕事 • 高齢社会において不可欠な存在 • 薬剤師の仕事は、人とのコミュニケーション能力が必要な仕事 • 薬剤師の仕事は医療現場で医師や看護師と協力し、患者にもっとも適した治療法を探す、人を助ける仕事 • 医療チームの一員として、患者さんに対して思いやりの心をもって薬を通して治療していくイメージ • 薬剤師は単に薬を調剤するだけでなく、医療チームの一員として患者さんに対して思いやりの心を持って薬を通して治療していくイメージ • 薬剤師は人の命に関わる責任感が必要な仕事 • 人の生死に関わる責任の重い仕事、だからこそ高度な技術や深い知識が求められている仕事 • 薬剤師は薬を扱っているだけでなく、人の健康を扱う仕事 • 薬を通して患者さんの病気を治す責任ある仕事 • 医療の現場で、人の役に立てる仕事
---------	--

	<ul style="list-style-type: none"> • 豊富な知識が必要で適切な判断力をもって仕事に従事する • 薬についての高度な知識が必要になってきているため一生勉強し続ける • 薬剤師になるまでも、なつてからもずっと勉強が大変 • 国家資格を取ることが出来、将来は安定している • 6年制となったことでさらに責任感や重大感が問われる職業 • 家庭をもつ女性でも活躍できる仕事 • 病院とかで処方せんをみて薬を患者に渡したり、簡単な仕事 • 病院で薬の袋詰めをしている人 • 医師が決めた薬だけを調剤する仕事 • 存在感がうすい • 医師より技能がなく、あまり患者と接点がない • 職務内容にオリジナリティーがない • 医師の指示に従っておけば無難に仕事がつむ • 医療関係の仕事のなかでは、あまり人とのかわりがない
薬学について	<ul style="list-style-type: none"> • 薬学＝化学、化学だけを学ぶものと思っていた • 薬で人助けができる学問 • 6年制で難しく、薬についての専門知識を学ぶ • 勉強が大変で卒業が難しい • 6年制になりしっかり学べるようになった

- 4) 長嶺幸子、大久保一徳、松家次朗、西村順二「神戸薬科大学1年生の意識調査―甲南大学経営学部1年生との比較検討―」、LIBRA 6号、61-74 (2004)
- 5) 桜井茂男『学習意欲の心理学』 誠信書房 (2000)、第2章、第3章